

CONTENTS

- 卷頭言
- 特集：在外研究記
- 第69回全国学術大会の自由論題・テーマ分科会募集のお知らせ
- 事務報告
 - 2019-20年度第1回常任理事会議事録
- 第15回太田勝洪記念中国学術研究賞について
- 地域部会報告
 - 東海部会第12回研究集会
 - 2019年度関東部会春季修士論文報告会
- 学会スケジュール（予告とお知らせ）
 - 2019年度関西部会大会のご案内
 - 2019年度西日本部会研究集会のご案内
- 日本現代中国学会事務局あて寄贈図書・雑誌

■ 卷頭言

中国の文学と文教組織の今～2019年3月の南京訪問から

伊藤徳也（東京大学）

3月初旬に南京を訪れた。以下はその際のごく限られた見聞と印象である。

『鍾山』という文学雑誌がある。1980年代のアヴァンギャルドな「先鋒派」文学が隆盛していたころ「新写実主義」を打ち出して中国文壇に大きな波紋を投げかけた雑誌である。江蘇省作家協会管轄下にある鍾山雑誌社は、江蘇省の省都南京に置かれている。南京というのは、北京や上海、広州のようなメガシティではない。深圳のように注目される新興都市でもない。同じ江蘇省には蘇州という知名度の高い大都市もある。私が南京を訪れたのは、たまたま校務があったからに過ぎない。とはいえ、せっかくの機会なので、呉俊氏（南京大学文學院教授）に南京の文学関係者と接触したいとメールに書いてみた。すると『鍾山』の主編賈夢瑋氏を紹介してくれた。

*

賈氏と面会したのは2019年3月6日、場所は南京大学の郊外にある仙林キャンパス内（市内には歴史のある鼓楼キャンパスが残る）の巴黎貝甜（Paris Baguette）珈琲館、仲介の労をとってくれた呉氏同席のもと、14時から16時過ぎまでお付き合いいただいた。賈氏は着席するやいなや、なんとウイスキーのボトルとグラスを2つカバンから取り出した。いっしょに飲みながら話そうというわけである。こっちも録音やメモの準備をしなかった。グラスが2つだけだったのは、旧知の

仲である呉氏が極端な下戸であることを彼が知っていたからである。話題は主に、雑誌の活動内容や、中国文壇の体制、システム、作家の作風転換等についてだった。

賈氏によれば、中国の文学雑誌には、作家協会系統と出版社系統の二種類があり、『鍾山』は前者の作協系統に属する。前者の作協系統の雑誌で有名なのは『人民文学』（中国作家協会）、『収獲』（上海市作家協会）などである。それらと違って、『十月』（北京出版社）、『当代』（人民文学出版社）、『花城』（花城出版社）、『大家』（雲南人民出版社）などは、後者の出版社系統の雑誌である。

web を見てみると、『鍾山』もそうだが、作家協会系統の雑誌社も、全般的には、それぞれ作協からは自立した雑誌社として自らを示している。とはいえ実際の関係はやはり緊密であるようである。江蘇省作家協会の HP に行ってみると、そこには作協の「書記処」や「党組」のリストが掲示されている。一人の第一書記の他、三人の書記・党組メンバーの名があがっている。その中に「賈夢瑋」の名（と顔写真）もある。一個の主体が作家協会と雑誌社両方を管理しているらしいことが窺える。

賈氏の話によれば、『鍾山』は、江蘇省作家協会と言わず、江蘇省政府から、財政的援助を受けているとのこと。その援助額がよほど潤沢なのか、雑誌の経営に関しては楽観的だと賈氏は言う。同席の呉氏は、政府からの援助がなければできないわけがないと横合いから口を挟んだ。だから、という脈絡ではなかったが、賈氏は、掲載する原稿はもちろん「反政府」はだめだ、と釘を刺すことを忘れなかった。

*

ところで、私に課せられていた校務というのは、南京大学の関係者と（東大との間の）友好的な交流関係を確認するとともに、3月に南京大学で展開する国際化教養教育プログラムの冒頭で東大側の代表として挨拶すること、そして、プログラム最初の二日間の集中講義を行うことだった。その間にちょっとした事件があった。

その集中講義は、予定していた講師の都合がつかず急遽私が務めることになったもので、慌てて用意したテーマが「中国人作家の日本語創作」。戦前、武者小路実篤の雑誌に日本語の作品を寄せた周作人と、2008年の芥川賞を取った楊逸の、日本語創作に対して寄せた信頼のあり方を比較し、二葉亭四迷にとってのロシア語、村上春樹にとっての英語、林語堂にとっての英語の場合等を合わせて、外国語創作の前提条件や機能を概観しようとしたものだった。急いで出したタイトルは「中国人作家の日本語創作一周作人と楊逸に即して」だった。

南京到着当日（3月3日）、南大側集中講義開催主体の外国語学院の院長と夕食をともにした。私の講義の話になった際、院長はやや唐突にこう言い出した。周作人は「漢奸」だからまずいという人もいるが、実は全然かまわない、しかし、楊逸というのは私達はあまり歓迎しない云々……。院長は事前にちゃんと私の講義のタイトルや概要に目を通していたのである。

もちろん、楊逸の芥川賞受賞作『時が滲む朝』が、政治的タブーである六四天安門事件を背景に民主化運動を描いていることは百も承知だった。しかし、中心テーマは外国語による文学創作ということだし、うまく処理をすれば彼らに迷惑はかかるまいと軽く考えていた。そこにしっかりと釘を刺されたのである。

さらに、院長との夕食の後で、集中講義を広報する学内のポスターを確認したら、他の講師のタイトルにはすべて副題がついていたのに、私の講義だけ副題（「一周作人と楊逸に即して」）が削除されていた。

翌4日、午後の講義の前に、南京大学関係者に昼食に招かれた。その際、隣に座ったホストであ

る外国語学院の党書記から、私の講義の副題を削除したことについて、お詫びとも断りともつかないある種の示唆をさらりと受けた。その党書記の態度からは、私に対する細やかな配慮が感じられた。

その席には、本来直接関係のない文學院の呉俊氏が私の旧知の間柄として呼ばれていた。その呉氏は、南京大学ひいては中国社会の現状を憂いて、様々な改革のヴィジョンを語り、彼の弁舌がもとになって、ひとしきり改革論議が飛び交う意外な昼食会となった。その議論の中で印象に残ったのは、呉氏の滔々たる現状批判と、外国語学院の党書記が、自分のことを“管理者 (guanlizhe)”と言っていたことだった。基本的に、呉氏の現状批判に対して党書記が「管理者」として応えるという場面が多かったが、しかし、その実、二人の関係は極めて良好なのであった。滞在中に目にした党書記は、確かに「管理者」として常に業務に忙殺されている様子だった。私の講義が党書記としての仕事を増やしてしまったのかもしれない、申し訳ない気分だった。

私の講義の一日目（4日）は周作人だけで、楊逸に言及するのは二日目の5日だったのだが、一日目の講義のあとの夕食の場でも、外国語学院の日本語学科の世話教員から、明日の授業では六四と民主化運動には触れないでくれるな、と念押しされた。

いろいろ話を聞くと、東大側から出された各集中講義のタイトルと概要を南京大学外国語学院内でチェックした際、日本近現代文学を研究して楊逸のことに詳しくあったある先生が、これは要注意だと指摘したらしい。こういうところから、『鍾山』等の文学雑誌だけではなく、大学も、反政府的なものに神経質になっている様子が窺えた。今回は、問題になる前に自己検閲をしてさっさと毒草の芽を摘んだというわけである。

*

さて、賈氏によれば、『鍾山』は中国で最も早く電子版を出した文学雑誌だとのこと。また、微信や微博を駆使して読者群と連絡をとり、その意見や観点到に耳を傾ける一方で、読者を表彰するなどして、積極的に読者層を育てようとしている。激しい資本移動と情報化の波の中で、文学雑誌などは、日本でも中国でも風前の灯の状態にあると思っていたが、中国（少なくとも『鍾山』）ではそうでもなさそうに見えた。むろん政府からの（おそらく潤沢な）財政援助があるという点で、そもそも日本と状況が違うのだが。

賈氏から、南京に注目してくれてありがたいと言われて、私はだいたい以下のように応答した。私は日頃から、北京（特に北京大学）は政治性が過剰に強く、個々人とは交流が容易でも組織になると付き合いにくい。上海は商業性が過剰に強く、政治性も相当強い。それに対して、南京は政経臭が比較的薄い文教都市であり、組織の形になっても、付き合いにくさをあまり感じない。何より政治的過剰さが無いのがよい、と。すると、賈氏と呉氏が二人で声を揃えて即座にこう応えた。「南京も今は上海とあまり変わらない。」（2019年4月21日記）

■特集：在外研究記

米国の大学図書館サービスについて

津守 陽（神戸市外国語大学）

勤め先の在外研究制度により、ニューヨークのコロンビア大学に滞在して現在7ヶ月が経った。在外に出る前は授業準備さえ無ければあれもこれもできるのでは、と大いに夢を膨らませるのだが、外に出たら出たで結局原稿締め切りに追われるのは世界中どこに居ても変わらない。今回は、そんな生活の中で最も恩恵を被っている、大学図書館サービスの充実ぶりについて記してみたい。

私の専門は近代中国文学なので、本来なら1902年設立以来の歴史を誇るC. V. Starr East Asian Libraryに最もお世話になっているはずなのだが、昨年9月に書庫が漏水被害を受けて閉鎖され、工具書以外の蔵書が現在利用貸出不可となっているため、東アジア関係の研究者や学生は大打撃を受けている。だがそのおかげでと言うべきか、アメリカの大学における図書館相互利用制度や電子書籍・論文利用の便利さを存分に味わうこととなった。

コロンビアで利用できる図書館相互利用制度には(1) Offsite (ReCAP)・(2) Borrow Direct・(3) ILLの3種がある。(1)のReCAPはResearch Collections and Preservation Consortiumの略で、そもそもはキャンパス外設置の巨大書庫であったが、2017年からプリンストン大およびニューヨーク公共図書館のReCAPとの書庫共有を開始したため、現在ではリクエストすればこの両者の蔵書も2~3日で入手できる。コロンビアの蔵書との扱いの違いは貸出延長ができないことくらいだが、一回の貸出期間は16週間と長いので充分である。(2)のBorrow Directはより大きいネットワークで、ブラウン・コーネル・ダートマス・デューク・ハーバード・ジョンホプキンス・MIT・プリンストン・スタンフォード・シカゴ・ペンシルヴァニア・イェールの各大学が加入している。同じくネットでのリクエストから1週間以内に書籍が届き、16週の貸出可。(3)は日本でもおなじみだが、(1)と(2)があまりにスピーディかつ充実しているので、基本的にこの2つだけで事が足りている。

使用したい資料が書籍や論文集のうちの一章分のみの場合は、OffsiteあるいはScan&Deliverのサービスから電子版を請求でき、早ければ翌日にはPDFをダウンロードできるリンクがパスワードと共に送られてくる。また電子書籍の提供も多く、人文社会科学系の膨大な研究書が、ProQuest社のEbook Centralをはじめとする数々のリソースによってオンライン全文閲覧できる。こうした電子書籍の利用のしやすさはアメリカの公共図書館とも共通していて、居住地区の公共図書館カードがあれば、OverDriveやHooplaといったシステムを通して、電子書籍やオーディオブック、CDや映画を家に居ながらにして利用できるのとよく似ている*1。論文データベースからの電子版ダウンロードは日本や中国でもよく利用したが、その範囲が研究書まで広がると、子育て中で外出しづらい筆者にとっては大助かりであった。さらに先日論文執筆時にありがたく利用したのが、HathiTrust(ハーティトラスト)である。HathiTrustはアメリカの大学図書館を中心としたデジタルアーカイブ事業で、Google Booksをベースとしながらも、書誌情報の表示や検索機能など、Google Booksとは異なる点も多い*2。筆者が今回利用したものは清末民初の英華辞典などパブリックドメインのものが中心であったが、少し試してみた限りでは、米国内でパブリックドメインとされている資料も、日本からもアクセスできるとは限らないようである。

紙幅の都合から矢継ぎ早に利便性と長所を並べ立てただけとなったが、予算の潤沢さや電子書籍の流通状況など、米国と日本の大学図書館が置かれた状況が大きく異なることを踏まえたとしても、IT技術を活用した学術資料へのアクセスの快適さにはやはり感銘を受けざるを得ない。ちなみにHathiTrustは日本の大学図書館でも導入の進んでいるEBSCOのディスカバリーサービスからも検索可能なので、筆者も在外に来る前から実は活用できたはずなのだが、迂闊にも今まで気づかずに来てしまった。コロンビア大に来てからそれに気づいたのは、大学OPACのインターフェイスの

使い勝手の良さによるところが大きい。コロンビアの OPAC では、上記の数々のリソースからの検索結果が統合して一覧表示されながらも、大学固有の蔵書・マイクロフィルム・電子書籍・雑誌論文記事などといった異なるフォーマットの情報がある程度分割表示され、直感的に欲しい情報にたどり着きやすくなっている。中国でも最近では民国期雑誌新聞のデータベース化の流れが顕著であるが、こうした資料へのアクセスを確保し、より開かれたものにしていくことが、今後ますます重要な意味を持つだろうと感じる日々を送っている。

*1 詳しくは渡辺由佳里「無料マーケティング」としての図書館の存在意義を認めたアメリカの出版社「FINDERS」2018年4月25日、<https://finders.me/articles.php?id=149>などを参照。

*2 HathiTrust の設立や著作権法をめぐる係争の経緯、Google Books との差異などについては、時実象一「大学図書館書籍アーカイブ HathiTrust」『情報管理』57 卷 8 号、2014 年が詳述している。

■ 第 69 回全国学術大会の自由論題・テーマ分科会募集のお知らせ

2019 年日本現代中国学会全国学術大会を、10 月 19 日（土）・20 日（日）の両日、関西学院大学西宮上ヶ原キャンパスにおいて開催することになりました。以下の応募要項の通り、会員の皆様から自由論題の報告希望者およびテーマ分科会の開催希望者を募集いたします。奮ってご応募くださいようお願い申し上げます。

今年の全国学術大会の共通論題は「中国における民間」です。

「民間」は、時代や分野によって様々な含意を持ち、特に中国においては定義しづらいキーワードですが、いくつかの角度から論じることができるでしょう。第一に、文化史から見た、知識人の対角としての「民間」です。およそ百年前の五四新文化運動の頃から、知識人は民間を強く意識し、1930 年代には文芸大衆化、抗日戦争期には民族形式など、知識人の主流文化と民間との関係をめぐって論争が繰り広げられました。その後、1990 年代には知識人が社会に参画するために必要な立場として「民間」が意識されます。

第二に、中国史における民間団体の系譜です。中華人民共和国成立と急速な社会主義体制の確立のもとで、民間結社は民主党派や大衆団体として再編されるものの、発展の余地を持ちませんでした。しかしながら改革開放や「南巡講話」を経て、近年の民間の草の根 NGO（社会組織）の活動には住民の生活や健康を守る活動を展開するなど注目すべきものがあり、政府においても環境汚染企業を被告にした環境公益訴訟の原告適格を認めるなど法整備を進めています。

また、インディペンデント映画や前衛芸術などの活動が保持する相対的に独立した領域も「民間」と捉えられるでしょう。「民間」は、社会科学においても重要なキーワードです。中国の「民間」をめぐっては、都市戸籍／農村戸籍、民間企業と政府など様々な問題系が存在しています。それぞれの研究領域から「民間」の持つ意味を確認し、そこから新たな「民間」認識を得ることができればと思います。

応募要項

自由論題の報告希望者およびテーマ分科会の開催希望者を以下のように募集します。事務的混乱

を避けるために、やや煩瑣なご依頼事項を列挙しておりますことをお許しください。

①自由論題での報告（一人の報告時間は25分程度）をご希望の会員は、氏名・所属・報告テーマおよび要旨（800字程度）を下記⑩の連絡先までお送りください。なお、大学院生は指導教員、またはそれに相当する会員の推薦状（推薦者の氏名、所属、連絡先、推薦理由を記載。書式は自由）が必要です。報告者は会員でなければなりません（非会員の場合は下記⑤を参照）。

②テーマ分科会の開催（報告者2～3名、約2時間）をご希望の会員は、企画者の氏名と所属、企画テーマ、討論者の氏名と所属、司会者の氏名と所属を確定したうえで、下記⑩の申込先までお送りください。分科会は原則として会員で構成するものとし、変更はできません。確認のため、報告者、討論者、司会者が会員であるかどうかを明記してください。

③自由論題およびテーマ分科会の応募に関するご連絡は、すべて電子メールでお願いします。その場合、ウィルス感染防止のため、添付ファイルは使用せず、メール本文にテキストで記載してください。なお、推薦状も原則としてメールで作成し、応募者はそれを転送するかたち（メール本文にペースト）としてください。どうかご理解とご協力をお願いいたします。

④締め切りは6月14日（金）とします。

⑤学会非会員の方で、自由論題での報告をご希望の方は、入会が応募の条件となります。入会申請をしていただいたうえで（日本現代中国学会のウェブサイト <http://www.genchugakkai.com/nyukai.html> を参照）、ご応募ください。入会手続きが報告発表までに完了しない場合でも、応募済みであれば発表は可能です。

⑥大会参加の旅費および宿泊費等は自己負担となります。

⑦報告希望者、テーマ分科会開催希望が多数に上る場合は、内容や会員歴などをふまえて調整させていただくことがありますので、あらかじめご承知おきください。

⑧応募をされた方には、メールにて実行委員会より応募受理の連絡をいたします。メールを送信した後、1週間以内に連絡がないときは、再度メールにてお問い合わせください。

⑨自由論題報告者は、大会10日前の10月9日（水）までに報告原稿（フルペーパー）またはレジュームのPDFファイルを実行委員会まで提出してください。提出は任意です。提出された資料にはパスワードを付し、期間限定で学会ホームページに掲載します。なお、パワーポイント等の機器使用を希望される場合は申し込み時に必ず明記してください。

⑩応募申込先は、以下の実行委員会メールアドレスです。

genchu2019@gmail.com

⑪応募のメール送信をする際、件名を以下のようにしてください。

*自由論題への応募の場合は「自由論題」

*テーマ分科会応募の場合は「テーマ分科会」

この機会に当学会未加入の優秀な大学院生の皆様にも、ぜひ入会と報告発表をお勧めくださいますようお願い申し上げます。

日本現代中国学会第69回全国学術大会
実行委員会事務局（関西学院大学西村正男研究室）

■事務報告

□2019-20年度第1回常任理事会議事録

日時：2019年2月28日（木）14:20～17:30

場所：同志社大学 大阪サテライト キャンパス OS2教室

参加：巖善平理事長、趙宏偉副理事長、菅原慶乃事務局長、北川秀樹会計担当理事、間ふさ子西日本部会代表、砂山幸雄東海部会代表、水羽信男編集委員長、小都晶子広報委員長、千野拓政 2018年開催校代表（オブザーバー）、西村正男 2019年開催校代表（オブザーバー）

欠席：中村元哉関東部会代表、中川涼司関西部会代表、川島真規約・財政健全化委員、田中仁規約・財政健全化委員

【報告事項】

1. 会務報告

菅原事務局長より事務局作成資料にもとづき、会員動向を確認した。2018年10月の総会以降2019年1月末までの間に事務局に申し出のあった退会者は1名、新規入会者は12名、承認待ちは4名である。また、会費長期未納会員32名、住所不明会員34名の内訳を確認した。巖理事長より会費納入状況にかんする次の問題が指摘された。昨年度は会費未納入者に対する催促が1回少なかったが、未納入者増は昨年度のみならず最近2年続けて見られる現象であること、またこのために複数年未納の会員の割合も増えている状況である。したがって、会費納入を促すために、催促状送付時期を検討することが必要である。常任理事会としてもこれを解決すべき課題として確認した。

2. 会計報告

北川会計担当理事より、資料にもとづき説明があった。2019年度総会で報告された2018年度会計報告における次期繰越金の金額の齟齬につき報告された。調査の結果、愛知大学開催の全国学術大会の参加費などの収入が、本来は全国学術大会実行委員会の運営資金として計上すべきところ、学会本体の「収入」として計上されていたことが分かった。この他、年会費の集計ミス（1件）、会誌売上げ・広告料の修正を反映し、常任理事会として修正版の「2018年度決算」を承認した。会計監査は、学会選出の2名の監査によって2018年12月14日に実施された。修正版「2018年度決算」は『現代中国』第93号に掲載する。この他、会費未納入者の増加に対処するために2019年1月中に改めて催促状を送付することを検討したが、事務処理上の困難のため見送らざるを得なかった。同時に、催促状送付のタイミングを合理化するため再検討する必要性を確認した。

3. 2018年度全国学術大会開催校報告

千野2018年開催校代表より、第68回全国学術大会運営への協力について謝辞が述べられた。次に、千野2018年開催校代表より以下の報告が行われた。参加者は2日間の合計で約230名であった。会計状況について、資料にもとづき、会計状況について報告された。今回の大会運営にあたっては、開催大学からの学会開催補助金は支出されなかった。大会参加者名簿の作成・参加費や懇親会費の管理にかんする学会事務局との役割分担については今後検討の余地がある旨報告された。

4. 編集委員会報告

水羽編集委員長より、『現代中国』第93号の編集状況について資料にもとづき報告された。2018年全国学術大会共通論題シンポジウム登壇者からの原稿を集約中である。投稿論文は6本であり例年よりも少なかった。これに関連して、入会申込書の承認が間に合わず投稿が受理できなかったものや、投稿後書式の修正を要請したがリライトが締切に間に合わず、結果として受理できなかった投稿があった。特に前者については入会申込書承認手続きの迅速化を図る必要性を確認した。また、2018年全国学術大会関連特集については、テープ起こしの必要が生じる可能性があり、2本の論文の翻訳料も必要となるが、その費用は2018年大会実行委員会側から出されることが確認された。書評原稿は4件を依頼した。

5. 広報委員会報告

小都広報委員長より資料にもとづき報告があった。ニューズレター第56号は1月末に配信され、2月6日に修正版を配信した。学会ホームページは、12月末までは小都広報委員長が行ったが、2019年1月1日からは新たに田村容子会員をホームページ管理担当委員として起用した。2018年10月以降、14件の情報を更新した。

本学会の広報ツールとしてはウェブサイトの他に、各会員宛に電子メールで情報配信することも可能であり、その場合は、各地方部会の代表を通じて事務局担当者宛に直接依頼することができる旨確認した。その場合、理事長・事務局長にも同報することも確認した。

6. 地域部会報告

中村関東部会代表に代わり、趙副理事長が書面にもとづき以下の各点について報告した。関東部会定例研究会は一般の聴衆も含め100人近くが集まり、活況であった。現在、5月の修士論文報告会の公募中である。

中川関西部会代表に代わり、菅原事務局長が書面にもとづき以下の点について報告した。2018年10月に、関西部会事務局の新しい体制を決定した。2018年12月に事務局会議を開催し、2019年6月1日（土）に立命館大学大阪いばらきキャンパスにおいて2019年度関西部会大会を開催することが決定した。現在自由論題報告を募集中である。

間西日本部会代表より書面にもとづき以下について報告があった。2019年10月以降新しい体制のもと部会を運営している。この間、1名の入会をメール審議により承認した。現在、2019年の研究集会について日程を検討中である（5月末または6月中旬頃）。

砂山東海部会代表より、書面にもとづき以下について報告があった。2019年2月に東海部会理事会を1回開催し、幹事を2名の選出と3名の新規入会者の承認を行った。3月2日に他団体との共催で講演会を開催し、その後に研究集会を開催する予定である。

7. 『現代中国』PDF化について

家永担当理事より書面による報告が提出された。作業は概ね順調に遂行されていることが確認された。電子メールでの掲載許可確認作業について意見交換を行った。

8. その他

(1) 京都大学人文科学研究所より、「国際協働利用・共同研究拠点」申請時に際して本学会よりサポートレターを送付したことにたいする礼状が届いた（12月26日受領）。

(2) 2018年12月8日に東洋学・アジア研究協議会総会があり、川島常任理事が参加した。同12月15日に地域研究学会連絡協議会（JCASA）総会が開催され、趙宏偉副理事長が参加した。なお、後者についてはJCASAニューズレター掲載用の学会活動報告文の草稿を菅原事務局長が作成し、回覧した。

【審議事項】

1. 新規入会者の承認

郭濟飛氏、川村邦夫氏、鈴木基子氏の3名の入会を承認した。

2. 学会事務の委託内容について

中研作成資料「日本現代中国学会 概要および受託業務特記事項」にもとづき、以下の各点について修正・変更することを確認した。

(1) 催促状の時期について、現行の4月、7月を、1月、6月とする。なお、9月には通常の会費請求を行う。

(2) 会費納入状況の集計方法を再検討する。具体的には、会費の請求方法について、過去の納入状況がわかる資料を付する（例えば払込取扱票に印刷するなど）。

(3) 全国学術大会の参加費・懇親会費の管理方法について、開催校との迅速な情報共有を実現するため、今後具体的な方法を検討する。なお、全国学術大会のさいには年会費は徴収しないことを確認した。

(4) 全国学術大会の参加者受付名簿および名札の作成は中研が主導する業務である。昨年はGoogle Formを使って事前の参加申込を実施したが、今年も中研が主体となってこれを行う。

(5) 全国学術大会の名札の作成、名札の管理は、大会終了後中研に送り、保管する。

厳理事長より、住所不明者について常任理事会で手分けして個別にメールで連絡してはどうかという提案がなされた。

3. 学会の会計年度について

川島規約担当理事より提出された修正案にもとづき検討した。修正案によれば、2020年度総会（2019年10月開催）において修正案に則った形での変更スケジュールを提示し承認を得た後、2021年度を18ヶ月とする（すなわち2020年10月～2022年3月）。審議の後、原則として修正案に沿って会計年度変更を進めることを常任理事会として確認した。ただし、移行措置の具体的な方法については継続審議とする。主な課題としては、18ヶ月に及ぶ移行年度の終盤6ヶ月間の学会活動費を適切に確保することが挙げられる。これについては、従来 of 会計年度でいうところの2022年度前半（2021年10月～2022年3月）が、修正案における移行年度（2021年度）の終盤半年間に相当することから、新会計年度における2022年度の会費の早期納入を強化することを基本方針とする。なお、修正案によれば2021年度は全国学術大会、会誌ともに2回の実施となることを確認した。

4. 2019年全国学術大会について

西村 2019年開催校代表より以下の点について提案があった。全国大会開催にあたっては、関西学院大学の開催補助を申請する予定である。同時に、大学の「後援」を獲得する。共通論題シンポジウムのテーマは「民間交流」とし、現在登壇者を選定中である。人選については、関西部会や常任理事会メンバーにも協力を要請したい。

共通論題シンポジウムのテーマについては、例年第1回目の常任理事会で共通論題趣旨の草稿を確認する作業を行っていたため、今後早急に諸作業をすすめることを確認した。具体的には、3月8日開催予定の関西部会事務局会議で共通論題テーマについて議論した後、常任理事会メンバーリストにおいて審議することとする。また、次回常任理事会では開催校の準備状況について確認する。なお、共通論題の方向について意見交換を行った。

厳理事長より、学会規約にある企画委員会を正式に立ちあげ、学会運営と共通論題の業務分担を明確化する提案がなされた。次回関西部会事務局会議において企画委員会について検討することが確認された。

企画分科会の運用について意見交換した。公募の後、各地方部会からの協力も場合によっては要請する。

今後の日程について、昨年度の例を確認した（4月12日＝自由論題・企画分科会公募開始、5月末＝学会ニューズレターの巻頭言で共通論題シンポジウムの概要を披露、9月3日＝全国学術大会のお知らせ配信、9月4日＝ウェブでの参加申込開始）。

5. その他

(1) 顧問の推薦について

西村成雄先生を顧問として推薦することを確認した。ご本人に了承を得た後に、2020年度総会において審議する。なお、顧問の任期については、規約における規定の検討を継続する。

(2) 第68回全国学術大会の自由論題枠のレジュメについて

一部の大学院生の発表レジュメについて、関東部会より問題が指摘された。大学院生の発表者については、自由論題申込の際に指導教員の推薦状を添付することになっているが、指導教員においては責任を持って実質的な指導を行うよう、認識を強化していただくことを確認した。

○その他

(1) 新規入会者の承認方法について

これまで、部会によって入会申込書の審議の方法が異なっており、西日本・東海部会はすでにメールでの入会承認を実施している。関西部会でもメール回覧による入会審査について検討の必要性を確認している。関東部会においてもメール審議について検討を行い、可能であれば学会としてメールでの入会審査の実施を開始することを確認した。

(2) 日本学術振興会賞受賞者の推薦について

日本学術振興会より、第16回（2019年度）日本学術振興会賞受賞者の推薦についての通知が届いたので、学会として推薦すべき対象者についての情報提供を依頼した。

(3) JCAS賞（地域研究コンソーシアム賞）の推薦について

地域研究コンソーシアムより、2019年度（第9回）地域研究コンソーシアム賞募集の通知が届い

たので、学会として推薦すべき対象者についての情報提供を依頼した。

(3)2021年度の開催校について

2021年の開催校について懇談した。

(4)『現代中国』の電子化について

趙副理事長より、学会誌の電子化の必要性について提案があった。今後は、編集委員会と協議したうえで、他学会の事例を収集し、メリット、デメリットを検討する案を出すことを確認した。なお、編集委員会でもこの件について意見を募ることとなった。次回常任理事会において改めて確認する。

(5)次回常任理事会の開催について

次回常任理事会は、2019年7月27日（土）に、2019年開催校である関西学院大学西宮上ヶ原キャンパスにおいて14:00から開催する。

[附記] その後、次回常任理事会の開催日程が7月13日（土）へと変更されました。開始時刻と場所に変更はありません。

■第15回太田勝洪記念中国学術研究賞について

第15回太田勝洪記念中国学術研究賞は、『中国研究月報』編集委員会より推薦のあった下記論文が選ばれた。2019年1月26日（土）に中国研究所で開催された授与式において、杉山文彦中国研究所理事長より受賞論文の発表および賞状・賞金の授与が行われた。なお、日本現代中国学会の『現代中国』編集委員会は今年度の推薦を見送った。

受賞作品：

◎古川ゆかり氏

「中国における中間所得層の高齢者福祉の行方——浙江省仙居県域の事例より」

（『中国研究月報』2018年11月号）

■地域部会報告

□東海部会第12回研究集会

東海部会の第12回研究集会が、3月2日（土）午後、愛知大学車道校舎で開催された。今回は、愛知大学現代中国学会との共催で、冒頭に呂芳上氏（台湾・中央研究院近代史研究所元所長、現兼任研究員、「民国歴史文化学社」社長）による講演会を開催し、それに引き続いて3名の会員による報告、討論が行われた。その概要は以下のとおりである。

呂芳上氏の講演「“五四”百年——中国近代の学生運動を振り返る」は、2014年の「ひまわり学運」にいたるまでの大陸・台湾の学生運動を振り返りつつ、その起点としての五四学生運動の歴史的な意義を再考したものである。呂氏は著書『従学生運動到運動学生』（中央研究院近代史研究所、1994年）の内容をわかりやすく敷衍して、五四学生運動の画期性、とりわけ学生運動の「組織力」に注目し、これがその後の各政治勢力とどのような関係を結んだかを中心に論じた。その伝統が今日、大陸、台湾でどのように引き継がれているのか考えさせられる講演であった。

講演会に続く研究集会では、以下の3報告が発表された。

- ① 柴田諒平（愛知学院大学大学院）「旧韓末における義兵闘争での義兵将の行動と意義：1907～1908年」
- ② 劉黎（愛知大学大学院）「越境の文学：国民革命軍将校・日本詩人黄瀛の詩と生涯」
- ③ 山本恭子（愛知県立大学客員共同研究員）「伝統葬礼習俗の変容と殯葬改革の受容：蘇州市、南京市を例として」

①は後期義兵運動で活躍した2人の義兵将、李麟栄と許蔦を取り上げ、その活動と義兵の理念を考察したものである。2人とも日朝関係のみならず、東洋全体を憂慮して義兵活動を起こしていたという指摘がなされたが、義兵闘争の歴史的評価や運動の全体のなかでこの2人の義兵将の思想をどのように位置づけるのか、等の質問が出された。

②の報告の主人公は、日本人の母をもち、日本で初等中等教育を受け、陸軍士官学校で学びながら、高村光太郎や草野心平らと交流して「日本現代詩人」として活躍、その後帰国して、南京国民政府時代には軍人として様々な活動に従事し、人民共和国成立直後に国民革命軍副師長から人民解放軍副師長へと転身するという、極めて数奇な生涯をたどった。報告はその陸軍士官学校（1927～29年）の活動について、学習、詩作と交友などを実証的に明らかにしたが、報告を受けて国民革命軍軍人としての活動がますますミステリアスに感じられ、質問もその点に集中した感がある。

③は中央・地方レベルで推進されてきた「殯葬改革」について、蘇州、南京でのフィールドワークをもとにその実態を報告したものである。江南では火葬の義務化は遵守されており、壽衣店が葬儀を取り仕切っていること、紙銭、含口など継承、保存されている儀礼や、文革中禁止されてその後復活した念仏などの状況が明らかにされた。南京と蘇州の葬儀の違いや、壽衣店の役割等について質疑が交わされた。

今回は呂氏の講演もあり、出席者約35名と比較的盛況な研究集会となった。[記：砂山幸雄会員]

□2019年度関東部会春季修士論文報告会

関東部会では5月11日（土）、東京大学駒場キャンパスにおいて、恒例の修士論文報告会を開催した。今回も昨年に引き続き、報告者多数につき、2つの分科会を設けて開催した。

歴史・政治分科会では、5名の報告があった。

第一報告の辛孟軻氏（一橋大学大学院社会学研究科）は、「近代中国の地理教科書における『東北』地域概念の形成と地域一体性の創出（1902～1937年）」と題し、清末から1930年代に至るまでの中国の地理教科書における「東北」という地域概念が1930年代に入り、日本の満州への侵略が露骨化するにつれて中国のナショナリズムと密接な関連をもつ政治概念へと変貌する概略を紹介するものであった。同報告に対して、その他の中国の辺境に関連する地域概念との相違や比較が必要であるのではないか、という質問が寄せられた。

第二報告の劉柯氏（神奈川大学大学院外国語学研究科中国言語文化専攻）「清末の福建省留日学生に関する研究——『留学生会館報告』と『官報』を中心に」は、『留学生会館報告』と『官報』に記載された清末福建留学生の存在に着目し、他省からの留学生の動向との比較においてその基本的な状況を示した。質疑応答では、彼らが留学した大学のアーカイブなどを精査することで留學生活の実態に迫れるのではないかと、福建留日学生の専攻分野や帰国後の状況についても目を配らねばならないことなどが提起された。

第三報告の郭夢堯氏（神奈川大学大学院外国語学研究科中国言語文化専攻）「清末中国人日本留学生の初期活動について——初期の留学生組織と生活を中心に」は、初期の留日学生によって結成された代表的な団体である勵志会と訳書編社について、それらの設立過程と背景、人員構成の有り様などの角度から分析した結果が披露された。質疑応答では、『訳書彙編』においてどの分野のどのような書籍がどのように訳されたのかについても分析をする必要があること、どのような史料から彼らの生活の実態を明らかにできるのかなどの質問が出された。

第四報告の黄哲氏（東京大学法学政治学研究科総合法政専攻）「中国共産党の統治における「闘争の哲学」の研究——「厳打」運動に見る毛沢東と鄧小平との連続性について——」では、鄧小平時代の1983年に行われた犯罪取り締まりの「厳打」キャンペーンに、毛沢東と共通する「闘争の哲学」や、政策実施の手法の共通点が見られることを強調し、毛沢東と鄧小平の連続性を論証することを試みた。会場からは、比較対象の設定や方法論の選択など、今後の研究のための有用なアドバイスがなされた。

第五報告の景旻氏（東京大学大学院総合文化研究科）「外事の形成と外交：中華人民共和国成立初期の上海を例として」は、上海を事例に、中華人民共和国成立の初期において、外国人に対する管理政策を検討し、「外国人の特権の撤廃」といった国家権益の擁護に当時の中国の対外政策の重点が置かれたと指摘した。質疑応答では、外事の定義の問題、上海以外のケースの可能性、そして外事を通じてどのような新しい視座が提起できるのか、などに関する意見が出された。

文学・思想分科会では、4名の報告があった。

第一報告：田中雄大氏（東京大学大学院人文社会系研究科中国語中国文学専攻）「中国「現代主義」文学の形成とその限界——穆時英・戴望舒を中心に」は、主に穆時英の作品に対する分析を通して、「現代主義」という用語の（単なる「モダニズム」の訳語ではない）批評用語としての可能性を論じた。質疑応答を通じて、報告者の言う「現代主義」と近似する新時代の「先鋒派」等の「モダニズム」や“後現代主義”、あるいは「狭義のモダニズム」、「近代主義」、「近代的な価値観」といった用語等との関係をいかに明確なものにするかという課題が残された。

第二報告：朱力氏（中央大学大学院文学研究科中国言語文化専攻）「『白銀時代』と『1Q84』の比較——反ユートピア文学の視座で」は、王小波の長編小説『白銀時代』と村上春樹の『1Q84』をいずれも「反ユートピア文学」とみなして比較検討し「反ユートピア文学」の重要性を論じた。質疑応答を通じて、「反ユートピア文学」の特徴の一つが善悪合わせ飲む「開放」性にあることなど、報告者の考え方が若干明らかになったが、今後いかにこの用語をより効果的な批評用語にしていくかが課題として残った。また、作品分析から導かれた議論をめぐって専門的な意見交換が活発に交わされた。

第三報告の孫安祺氏（東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻）「陳舜臣初期作品研究——『枯草の根』に即して——」は、歴史作家として知られる陳舜臣の初期の創作、推理小説作家として文壇にデビューした際の作品『枯草の根』（1961）を取り上げた。1930年代上海で抗日運動にかかわった神戸華僑たちの過去の物語の分析をとおして、彼の推理小説に見られる「歴史性」について指摘がなされた。フロアとの間で、現在の中国における推理小説ブームと本テーマ設定との関わり、推理小説というスタイルを作者が選んだ理由、作者が台湾系華僑でありながら作品では中国大陆の歴史を描いた意味などについて質疑応答が行われた。

第四報告の王秋琳氏（東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻）は「転換期における中

国先鋒派作家余華」と題して報告を行った。余華の代表作『活着』の初出『収獲』版（7万字の中篇小说）と単行本長江文芸版（12万字の長篇小说）を比較分析し、張芸謀監督による映画化を契機に大幅に加筆したことによって、余華が文革を見る新しい視座を獲得したと結論づけるものであった。質疑応答では、「転換期」とは何を指すのか、作風の転換は中国政治・社会の変動によるものか作者個人の生活の変化によるものか、直前の作品『呼喚与細雨』『夏季台風』をどう評価するかなどをめぐって、活発な議論がなされた。

参加者は33人を得て、盛況であった。

■学会スケジュール（予告とお知らせ）

□2019年度関西部会大会のご案内

日本現代中国学会2019年度関西部会大会のプログラムをお届けいたします。周囲の方々にもお声をかけていただき、多数ご参加くださいますようお願いいたします。

お手数ですが、出欠について以下のうちいずれかの方法で5月24日（金）までにご連絡ください。

(1)別紙「参加申込書」にご記入の上、電子メールで関西部会事務局総務宛にご回答ください。

(2)電子メールの本文に「参加申込書」の項目を記載して送信して下さっても結構です。

(3)Google formもご利用いただけます。以下のURLより必要事項をご記入の上送信してください。

フォーム送信後控えのメールが自動送信されます。<https://forms.gle/9mQ8DmjGhmoKYzyD9>

会場の都合上、事前に参加人数を把握する必要がありますので、お手数ですが協力くださいますよう、よろしくお願いいたします。

参加申込書送信先：関西部会事務局（総務） 何彦旻

電子メール：jamcs.kansai@gmail.com

*送信時に[アットマーク]を半角記号へ置き換えてください

*件名は[現中関西部会大会参加申込]としてください。

●日本現代中国学会2019年度関西部会大会（プログラム）

【日時】2019年6月1日（土）10:00～17:00（受付は午前9時頃より開始）

【会場】立命館大学大阪いばらきキャンパス B棟（大阪府茨木市岩倉町2-150）

【アクセスマップ】<http://www.ritsumei.ac.jp/accessmap/oic/>

【キャンパスマップ】<http://www.ritsumei.ac.jp/file.jsp?id=229845&f=.pdf>

【受付】B棟（立命館いばらきフューチャープラザ）3階

【参加費】無料（懇親会費用は別途）

【自由論題報告】10:00～12:00（報告30分、コメント・討論10分）

＜経済・政治分科会＞ *会場：研究室1（4F）

○ 司会：辻美代（流通科学大学）

○ 第一報告（10:00～10:40）：尚亜龍（島根県立大学・院生）

「中国における人民公社の経済的目標について」

○ コメンテーター：巖善平（同志社大学）

- 第二報告 (10:40~11:20) : 李奎 (島根県立大学・院生)
「世界金融危機以降の河南省産業構造の変化—産業連関の視点から」
- コメンテーター : 金澤孝彰 (和歌山大学)
- 第三報告 (11:20~12:00) : 李静 (京都大学・院生)
「中国朝鮮族のアイデンティティについての一考察」
- コメンテーター : 鄭雅英 (立命館大学)
〈歴史・文化分科会〉 *会場 : 研究室2 (4F)
- 司会 : 西村正男 (関西学院大学)
- 第一報告 (10:00~10:40) : 菊地俊介 (南開大学)
「日本占領下北京における新民会暑期青年団の青年像と教官像」
- コメンテーター : 鄒燦 (大阪大学)
- 第二報告 (10:40~11:20) : 李珏 (北海道大学・院生)
「分衆化する中国の映画観客と流通ルートに対する考察」
- コメンテーター : 阿部範之 (同志社大学)
- 第三報告 (11:20~12:00) : 川村邦夫 (大阪市立大学・院生)
「中国東北部における日本人中学生 (旧制) が学んだ中国語とその背景」
- コメンテーター : 鄒燦 (大阪大学)
〈環境分科会〉 *会場 : 研究室3 (4F)
- 司会 : 林宰司 (滋賀県立大学)
- 第一報告 (10:00~10:40) : 許俊卿 (大阪大学・院生)
「リスク社会における中国の大気汚染問題に関する新聞報道分析からの再考 : 1970年から2016年までの「人民日報」を対象として」
- コメンテーター : 北川秀樹 (龍谷大学)
- 第二報告 (10:40~11:20) : 張曼青 (大阪大学・院生)
「『ポスト郷土中国』における郷土性の継承から再考する : 養豚廃棄物汚染問題への展望」
- コメンテーター : 櫻井次郎 (神戸市外国語大学)
- 【昼食休憩】 (12:00~13:30) *関西理事会 (12:15~13:15 *研究室4 (5F))
- 【共通論題 シンポジウム】 *会場 B374 コロキウム (3F)
テーマ「中華人民共和国の70年—新たな視点から—」
- 13:30~13:40 司会・趣旨説明 : 中川涼司 (立命館大学)
- 13:40~14:25 (歴史) 水羽信男 (広島大学)
「中国共産党の「新民主主義革命論」の再検討」
- 14:25~15:10 (経済) 田島俊雄 (東洋文庫研究部研究員)
「近現代中国の経済発展をどう書くか」
- 15:10~15:55 (文学) 宇野木洋 (立命館大学)
「「当代文学」70年を概観する—1950年代の営為を参照系に— (仮)」
- 15:55~16:10 コメンテーター : 田中仁 (大阪大学)
- 16:10~17:00 質疑応答
- 懇親会 (17:30~19:30)

会場：Camping Kitchen 立命館大阪いばらきキャンパス A棟1階

TEL：050-3468-7654 URL：<https://r.gnavi.co.jp/cndapung0000/>

一般5,000円・学生（院生）3,000円 ＊参加希望者は必ず申込書にて事前にご連絡ください。

○ 関西理事会のご案内

昼食休憩中に関西理事会を開催いたします。関西理事の方は5月24日（金）までに出席を事務局総務担当何彦旻宛お知らせください。

○ 参加者の皆さんへ

1. 会場には、駐車場、駐輪場はありませんので、公共交通機関でお越しください。当日の昼食は周辺のレストランやコンビニエンスストアなどをご利用ください。

2. 出張依頼状への押印は関西部会事務局ではなく、全国事務局で行います。必要とされる方は、下記宛ご連絡ください。

〒112-0012 東京都文京区大塚6-22-18 一般社団法人 中国研究所内日本現代中国学会事務局

TEL 03-3947-8029 / FAX 03-3947-8039 / E-mail:c-genchu[アットマーク]tcn-catv.ne.jp

3. 関西部会大会会場では、学会費の納入は出来ません。学会費は学会事務局に納入してください。学会費の振替口座番号等は以下の通りです。

- ・口座名称：日本現代中国学会
- ・口座番号：00190-6-155984

なお、インターネットバンキングを利用する場合、下記のゆうちょ銀行口座に納入してください。

- ・店名：ゆうちょ銀行ゼロイチキュウ（〇一九）支店
- ・預金種目：当座
- ・口座番号：0155984

4. 会場にコピー機はありません。報告者の方は配布資料をあらかじめ印刷してご持参下さい。

□2019年度西日本部会研究集会のご案内

先日標記ご案内をお送りいたしました。プログラムが下記のように一部変更になりましたので、再度お送りいたします。奮ってご参加いただきますようお願い申し上げます。

日時：2019年6月15日（土）13:00～17:55

場所：福岡大学 文系センター棟15階 第六会議室

〒814-0180 福岡市城南区七隈八丁目19-1

<https://www.fukuoka-u.ac.jp/help/map/>

<https://www.fukuoka-u.ac.jp/aboutus/facilities/map.html>

●日本現代中国学会西日本部会研究集会 [プログラム]

13:00 開会

13:05～13:35 第1報告【政治】 司会：大澤武司（福岡大学）

下野寿子（北九州市立大学）「台湾の対中農業投資の位置づけに関する一考察」

13:35～14:05 第2報告【経済】 司会：大澤武司（福岡大学）

劉鵬（広東海洋大学）「中国農村金融における農業銀行の役割について」

14:05～14:35 第3報告【歴史】 司会：大澤武司（福岡大学）

和田英穂（尚絅大学）「日本人の植民地責任意識に関する試論～急増する高校の台湾修学旅行を一例として」

14:35～15:05 第4報告【社会】 司会：甲斐勝二（福岡大学）

尾崎孝宏（鹿児島大学）「内モンゴル自治区シリングル盟における外国人牧畜労働者の浸透」
（休憩）

15:15～15:45 第5報告【言語・文学】 司会：新谷秀明（西南学院大学）

西谷郁（西南学院大学・非）「オムニバス映画『女兒経』の創造性と協同意識」

15:45～16:15 第6報告【言語・文学】 司会：新谷秀明（西南学院大学）

李海燕（東京理科大学）「現代中国映画における戦間期日本イメージの変遷」

16:15～16:45 第7報告【言語・文学】 司会：岩佐昌暲（九州大学名誉教授）

小笠原淳（熊本学園大学）「身体とエクリチュールの葛藤——余秀華をめぐる考察」
（休憩）

16:55～17:55 講演

佐藤賢（明海大学）「中国ドキュメンタリーと〈詩人〉」（仮題）

17:55 閉会

17:55～18:05 西日本部会総会

18:20～20:00 懇親会（福岡大学文系センター棟16階スカイラウンジ第二特別室）

※会費：有職者3000円、院生2000円

■日本現代中国学会事務局あて寄贈図書・雑誌

大東和重著『台南文学の地層を掘る—日本統治期台湾・台南の台湾人作家群像』関西学院大学出版会

尾崎孝宏著『現代モンゴルの牧畜戦略—体制変動と自然災害の比較民族誌』風響社

清水麗著『台湾外交の形成』名古屋大学出版会

高田幸男編著『戦前期アジア留学生と明治大学』東方書店

藤井勝・平井晶子編『外国人移住者と「地方的世界」—東アジアにみる国際結婚の構造と機能』昭和堂

=====

日本現代中国学会事務局

〒112-0012 東京都文京区大塚 6-22-18

一般社団法人 中国研究所内 日本現代中国学会事務局

TEL 03-3947-8029 FAX 03-3947-8039

EMAIL c-genchu[アットマーク]tcn-catv.ne.jp

郵便振替：東京00190-6-155984

広報委員長：小都晶子（摂南大学）

ニューズレター編集：鳥谷まゆみ（北九州市立大学）

日本現代中国学会HP：<http://www.genchugakkai.com>

=====